

現代の「合本」を考える

アンテナを張る必要



近代日本経済の先駆者として著名な渋沢栄一は、「合本主義」を唱え、株式会社制度を導入して企業を設立し、近代化に必要な産業の発展に道を開いたといわれている。「合本」とは資本を合わせることであった。

貧しい明治日本では、「お金」は貴重な経営資源であったし、近代的工場の建設に必要な資金を全額出資できる特定の個人資産家もそう多くはなかった。だから、株式会社はうってつけの手段であった。

技術は官営工場などのお雇い外国人を通して借りてくることができる、必要な働き手は育成することが計画されていた。それについても先立つものは資金であったからであ

ろう。渋沢栄一の提言は、時代の状況に合ったものだった。

この「合本」という渋沢の考え方は現在にどう生かすことができるだろうか。日銀による異次元の低金利政策のもとでおカネはだぶついて行き場を失っている。ベンチャー企業などに必要な資金が届かないという制約はあるが、インターネットを利用したクラウドファンディングなどの新しい手法も利用できるようになっている。

もともと、おカネという経営資源は、適切なリターンとリスクが十分に説明できれば集めることができる。ここに現代経済社会の特徴がある。

しかし、おカネだけでは新しい仕事を生み出す力は満足

なものにならない。多くの人たち、社会の抱えるさまざまな問題に気付き、何かをしたいと考えている。ビジネスだけではなく、非営利組織なども含めて、社会貢献や地域再生などの取り組みが進められている。その潜在的なエネルギーは膨大なものがあるが、それを解放して成果につなげる条件が整っていない。

経験したことのない事態

前進するためには、資金以上に問題の解決策に結び付く、知恵や知識、ノウハウが必要になる。後発工業国の明治日本であれば、学べべき相手があり、その先進事例から技術などを借りることで解決に近づくことができた。

しかし、今私たちが直面しているのは、経験したことのない新しい事態だ。財政的な限界から行政による対応では、たくさん問題がこぼれ落

ち、私たちの目の届くところで日々、解決を求められている。

ブレークスルーが見いだせないまま前進できない場合も多い。そのような状況下であるが、目を凝らして、私たちの狭い経験を超えるような知見や取り組みを探してみれば、活用可能なものを見いだすことができる。

同じような取り組みで苦労しているのは一人ではない。それぞれの知識や知恵と表現されるような経営資源を集めることにこそ、現代の合本の意味がある。

そのためにはアンテナを張る必要がある。それを通して、それまで孤立的な営みにとどまっていた解決への取り組みを連帯させ、共同させる志を育む必要がある。そうして生まれる共鳴し合う力を信頼したい。

(東京大名大学教授 武田晴人)